

第４回光市地産地消プラン推進会議 議事録

日 時 令和４年１１月１６日（水）１５時００分～１６時１５分
場 所 光市役所３階 大会議室１・２号
出席者 委員 ２０人（欠席 ５人）、事務局 ４人

１ 開会

２ 議長あいさつ

本日の会議では、第４次光市地産地消プランの中間案が議題である。これには、持続可能でより良い世界を達成するための国際目標ＳＤＧｓや農林水産省が打ち出したみどりの食料システム戦略等、現代社会を象徴する理念や具体的な取組が随所に散見され、新しいプランらしい新鮮な雰囲気を感じ取った。

どうか委員の皆様には、熱心な議論をしていただき、本プラン案の更なるブラッシュアップを図っていただければ幸いである。

３ 議題 第４次光市地産地消プランの中間案について

事務局より資料に基づいて説明ののち質疑意見等

● 委員

１ページの「２ 計画の位置付け」の図に「やまぐち農林水産業成長産業化行動計画」とあるが、これは今年度で終了し、次期計画は令和５年度から開始する。次期計画の名称が決まり次第、差し替えていただきたい。

７ページの「（５）水産業」に「漁業青年等の指導に適性を有する中核漁業者に対する「指導漁業士」とあるが、「漁業青年等の指導に適性を有する中核漁業者である「指導漁業士」や「漁業青年等の指導に適性を有する「指導漁業士」とした方がわかりやすいのではないか。

また、同じページに「本市と上関町の栽培漁業センター」とあるが、正式名称は「光・熊毛地区栽培漁業センター」である

ため、修正をお願いしたい。

9 ページの「ア 生産規模の拡大と生産性の向上」に「柳井水産事務所」とあるが、平成30年4月から「周南農林水産事務所」に変わっているため、修正をお願いしたい。

● 委員

35 ページの「(2) 担い手の確保と経営体の育成」に「②農業法人や認定農業者など農業の中心的担い手の育成・支援及び経営体連携の促進」とあるが、具体的に自分たちがどのような支援を活用できるのか知りたい。

周南市にはあるが光市にはない補助で魅力的なものもある。そのような補助が光市にもあればよい。

● 委員

43 ページに「光ひまわりプロジェクト」とあるが、このような試みは、自分としても楽しみにしており、協力したい。

● 委員

消費者向けアンケートの結果（16 ページ）を見ると、購入時に重視する点に「安さ」や「鮮度」をあげる人がいる一方で、「顔が見えること」や「こだわり」（エコやオーガニック）をあげる人も多い。こだわると手間がかかり安くない。ベクトルが違うものをどう扱うか。

また、里の厨は、設置後10年経過し、施設の在り方や流通の体制、農家との関係、販売システム等変わってきていると思う。見直しが必要ではないか。

10年経つと、高齢化もするし、作り手、消費者の意識も変わる。売り手に関する情報発信や人の育成など、里の厨の見直しに関しても計画に書き込んでいただけたらと思う。それによって、安くない物もきちんと売れる環境ができてくる。里の厨がそのような部分を発信していくことで、消費者に啓発、教育していくことも必要だと思う。

● 委員

指摘のとおり、10年経って、里の厨の置かれている環境は明らかに変わっている。

こうした中、出荷者を増やすため、令和3年度から販売農家の育成研修を行っている。

一方、アンケート結果（17ページ）にあるように、里の厨が選ばれる理由は鮮度や安さ、安心感であり、「こだわり」という点でのオーガニック野菜については取扱いが難しい。出荷する農産物の農薬使用の状況を徹底して管理しており、国が定めた「無農薬」の定義との兼ね合いもある。ただ、今後に向けて、他の野菜と区別した陳列方法などは検討している。

● 委員

以前は里の厨でも作り手の写真が貼ってあったが今はない。顔が見えることが大事なので、出荷者ごとに箱を分けたり、出荷者のコメントや写真で作り手が見えたりするとよいと思う。

いきなりはできないと思うが、例えばこだわっている人たちのコーナーや月に1回でもそういう人が出店できる場所があるとよい。計画の先や里の厨の考えの中にそういうものが加わってくると可能性や楽しさが出てくるのではないかと思う。

● 委員

確かに以前は出荷者全員の顔写真とコメントを表示していたが、10年経ったことによって生産者の顔が変化し、いなくなった方も多くいたため、一度見直そうということで外した。ただし、必要であれば、また作るということも考えていきたい。

オーガニックや無農薬についても、知恵をお借りしたい。

● 委員

J Aの直売所でも、以前は生産者の顔写真やコメントを載せていたが、数年前からは、1人1ページで写真と野菜への思いを載せた30ページ程度のパンフレットを作成している。

大変な手間とお金がかかり、随時更新していく必要はあるが、紙媒体にこだわらなくても、電子的に発信することもできる。

このような取組も生産者の支援につながると思う。

また、生産現場としては高値で売りたいという思いがあるが、消費者にも目を向けなければならない。現在、N P O 法人と付き合いがあるが、高齢者を含め、多様な人材がいらっしゃる。これからどうやって連携をとっていかうか考えている。

今後、規模拡大だけ支援すると、同じ品目ばかりが出荷されることになる。S D G s の観点からも、少量多品種の高齢農家等の支援も必要である。この点は32ページの「(1)「生産」: 生産意欲を掻き立てる戦略的な生産環境の整備」に方向性が示されているのではないかと思う。

最後に、同じページの「(3)「流通・販売」:「山」と「海」の融合による流通・販売体制の進化」に「開設が予定されている水産業振興拠点施設」とある。可能であれば、農協も関わることもできたらと思う。

● 委員

31ページの「地産地消のつながり」の図でいうと、「食育推進」は消費の分野にあたると思う。食育は子どもの教育と間違われることがあるが、食育は食に関する知識や、食を選択する力を身に付けて、健全な食生活を実践することができる人間を育てることで、子どもから高齢者まですべてが食育推進の対象となる。

33ページの施策の柱と目標のうち、消費分野の目標は「地元の消費者に選ばれる仕組みづくり」とあるが、この「選ぶ」というところが食育にあたると思う。食育は、消費者に選ばれるということでもいいのか、消費者の方もしっかり地産地消を学んでいくということも必要だと思う。消費者が選ぶという視点も大切ではないか。

「消費者に対する情報発信や意識啓発が重要」とあるが、意識啓発というところが食育だと思う。食に関する知識や食を選択する力を身に付ける食育の意識啓発が消費者の力をつける上で大切だと思う。

34 ページ、施策の体系で、消費の展開の方向に「食育による地産地消の意識啓発」とあるが、これも食育が先か、地産地消が先かということで、地産地消から入る食育という考え方もあろうかと思う。

今回の会議においては消費者の立場で参画されている方や食育推進の分野の方もいらっしゃるので、どちらが先かという点について意見を聞いてみたい。

● 委員

食育と地産地消は、どちらが先か後かではなく同列なのではないかと思う。

10 年前、ある市では、ベジタブルマイスターを育てるために、食育や地産地消、地域の活性化に関わりたい人で、学ぶ意欲のある人を支援する取組を行っていた。これは一例だが、消費者が勉強する機会を設けることで食育への理解も進むし、地元のおいしいものの食べ方もわかり、加工にもつながると思う。

どちらが先というよりも並列の書き方をして、具体的な施策を入れたらどうか。

● 委員

全産業、全品物、全店舗を一気によくすることは難しいので、何かに特化することが必要ではないか。

特に、林業は人がいない。評価できるのは、森林組合が少ない作業員で一生懸命やったことだが、それも全く追い付いていないと思う。

林業研究会も本当はもっと研究をしないといけないと反省している。

● 委員

市役所を事務所とすれば、里の厨は現場である。市役所から里の厨に常駐させれば、消費者の方、生産者の方と直接話す機会が増え、この会議ももっと中身のあるものになると思う。

● 委員

自分は大和地域で地元の農産物を使って加工品を作っている。里の厨で「地元産大豆を使っています」などと宣伝してもらえるといいと思う。地元産の物で作ったことがわかると買う人も安心して買える。

● 委員

森林チッププロジェクトとあるが、チップ化する機械はどこか見込があるのか。自分たちもチップ化したことがあり、とても大変だったが、見通しがあるのか。

● 事務局

これから検討していく。プロジェクトについては、チャレンジ項目としてできたらいいなというところから始めて、意見を聞きながら一緒にやっていきたいというものである。

誰かに借りる、委託するということもあると思う。いろいろ教えていただき、ご協力いただきたい。

● 委員

ひまわり油はどうやってやるのか。ノウハウを持っている方がいるのか。

● 事務局

今から検討していく。市役所では作れないので、お知恵を持った方を探し、一緒にやっていく。

● 委員

43ページは全て案なのか。

● 事務局

皆で少しずつ取り組んでいくためにこれから挑戦してみようというもので、今考えられるものである。必ずしもこのとおりにはならないと思う。

● 委員

職員はころころ変わるので、それがうまく伝わらず、こちらにもうまく伝えられず、そこで行き違いは結構あると思う。

さきほど、光ひまわりプロジェクトが楽しそうという意見が

あったが、機械の手配等は難しいのではないか。

● 委員

自分で全部やろうとは思っていない。圃場をお貸しするなどができれば。

● 事務局

光ひまわりプロジェクトは、耕作放棄地にひまわりを植えることで少しでも農地を維持していこうという取組の第一歩で、そこから、市民と意識を共有できるかもしれないし、少しずつ広がっていけばいい。

例えば農地をお持ちの方や小学生、中学生にも一緒に植えてもらうなどの取組が考えられる。ひまわり油を使った加工品にも広がっていったらいい。

● 委員

未来がこうなっていけばいいということであれば、皆さんに夢ある取組を募集すると、こういう計画を策定していると市民に知ってもらう機会にもなる。

例えば森林チッププロジェクトについても、間伐材でゴルフのピンを作るなど、いろいろなことができる。これはあくまでも案ということでとらえたらよいと思う。

● 委員

現計画のプロジェクトはどのようなものなのか。それを引き継いだものはあるのか。

● 事務局

プロジェクトは今回新たに入れたもので現計画にはない。

プロジェクトではないが、9ページから15ページに現計画の成果と評価をまとめている。

● 委員

15ページの「消費拡大に向けた情報発信回数」は何をしたのか。

● 事務局

S N S での情報発信、市広報への光市産食材を活用したレシ

ピの掲載、里の厨において米消費拡大に関する情報発信等を行った。

● 委員

電子と紙での発信を合わせた回数なのか。

● 事務局

そのとおり。

● 委員

市の特産物として試験的に取り組んで欲しいものがあれば育てる。ひまわりについても言ってもらえたらやる。そうすることで具体的に一つ進むと思うので、ぜひ声をかけてほしい。

● 委員

こういった会議にいろいろな方が来られて、これほど積極的に意見が出るのは光市だけだと思う。

いろいろなご意見があったが、できることとできないことがあると思う。自分たちも新規就農者の支援や新規作物の導入の支援等を考えているが、費用対効果等でストップした部分もあった。生産者のモチベーションを落とさない形で今後やっていけたらと思う。

今後の農業方針について、行政と市民の方と農業者でいろいろな意見を聞きながらよい形になればよい。

4 その他

事務局から今後の予定について連絡

- ・ 来年2月～3月頃に次回会議を開催し、プランの最終案を皆様にご確認いただきたい。

5 閉会